

がそこにあるかのように作られているが、実際には祈りの儀式が沖縄の内部にとどまるように形骸化されており、戦争から生じた基地問題に起因する多くの課題が残されたままである。むしろ、セレモニーだけが注目されることで現実の問題に人々の目が向かないように覆い隠されているのではないかだろうか。

本作品は、沖縄の土地に残された弾痕などの戦争の傷跡や、戦後返還地に建てられた商業施設などの風景を手がかりに戦争の記憶を読み取る試みである。土地の記憶は私たちが覗き込むことで継承されるし、覗き込もうとしなければ忘れ去られる。一人一人が沖縄戦の痕跡を眼差し、戦争のない未来を考えることが本当の意味での「慰靈」になるだろう。

#### 石原 海 ISHIHARA Umi

1993 東京都生まれ  
2018 東京藝術大学美術学部先端芸術表現科卒業  
2024 ロンドン大学ゴールドスミス校MA Artists' Film & Moving Image在学中

コミュニティや社会から疎外された人々を描くことをテーマに、個人的な記憶と社会問題を織り交ぜた映像作品を制作するアーティスト。北九州市にあるキリスト教会に集う人々が聖書劇を作る日々を記録した出品作品では、苦難を抱えながらも懸命に生きる人々の姿を希望とともに描いている。

#### 12 重力の光

##### — Gravity and Radiance —

2022

映像1点（30分、USBメモリ）、ムービングライト  
video installation (30min., USB stick) and moving light  
福岡市美術館所蔵  
Collection of Fukuoka Art Museum

\*\*\* 作家のことば \*\*\*

#### 罪人の自分に立ち返る

休学していた大学院を卒業するため、ロンドンに戻ってきて一年が経った。北九州とはまったく違う生活にするといと馴染んでしまう自分の都合よさに驚きながらも、北九州で教会に通っていた生活をときどき恋しく思い出す。こっちに戻ってきてから聖書は一度も開いていない。でも、罪を犯した気持ちになるくらいのひどい二日酔いで目覚めた日曜日の朝、ふと聖書にあるパウロの言葉が浮かぶのだ。「わたしは、自分のしていることが分かりません。自分が望むことは実行せず、かえって憎んでいることをするからです。」なんでこんな言葉だけ覚えてるんだろうと思いながら、生きるということは罪を犯すということである、という東八幡キリスト教会で

学んだ本質に立ち返る。アタシはめちゃめちゃ罪人だ。教会に行かなくなると、その事実をときどき忘れそうになる。パレスチナでの虐殺がはじまり、ついに300日以上が経過した。最初は毎週行っていたデモにも、いまは1ヶ月に1回足を運ぶ程度になってしまった。パレスチナの状況を友人と日々話していたけれど、最近はその頻度も少なくなっている。慣れることの怖さと、なにもできていない自分が情けなさすぎる。毎週教会に足を運ばないと罪人であることを忘れるような自分にうんざりする。パレスチナ人の虐殺をやめろ。アタシはあらゆる場所でそう叫んであらがうことで、遠い国で起きている現行の痛みに少しだけ追いつくことができる。あらがうためにはパワーがいる。こわがる人もいるかもしれない。アタシだってなるべくならハッピーでいたい。でもそれだけじゃ駄目なんだよこの世界は。この世界の不条理から、虐殺から目を逸らしてはいけない。あらがい続けた人間がいたという事実が歴史化されることに意味があると、ただただ信じる。だからアタシは作品を作るし、あらがい続ける。罪人だけど。

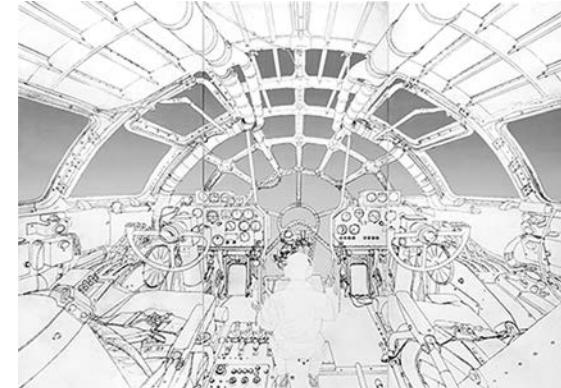
#### [企画展]

## 奮起する現代作家たち あらがう

#### Special Exhibition Struggle

会期 2024年9月14日(土)-12月15日(日)

会場 近現代美術室B



上:石原 海《重力の光》2022年、福岡市美術館所蔵

中:李 晶玉《Enola Gay》2022年、作家所蔵

下:寺田健人《uchikabi for militarism》2023年、作家所蔵



〒810-0051  
福岡市中央区大濠公園1-6  
TEL 092-714-6051 (代表)  
FAX 092-714-6071  
[www.fukuoka-art-museum.jp](http://www.fukuoka-art-museum.jp)

2024年、福岡市美術館は開館45周年を迎えます。

福岡市美術館が開館した頃、21世紀は、さまざまなもののが発達し、人々にとって暮らしやすい社会になっていると予想されました。しかし、21世紀も四半世紀が過ぎた現在、テクノロジーやコミュニケーション手段の発達によって便利な社会になつてはいるものの、ウクライナやパレスチナなど世界各地で戦火は絶えず、戦争や災害、経済格差などで苦しむ人々が存在します。私たちはこうした状況を、どのように受け止め、立ち向かうべきなのでしょうか。

本展は、李晶玉、寺田健人、石原海という1990年代生まれの3名の作家による、12点の作品で構成した企画展です。李は、戦争によってもたらされるものへの想像を、寺田は、沖縄に残る戦争の傷と記憶を、石原は、コミュニティや社会から疎外された人々の存在と希望を、浮かび上がらせています。絵画、写真、映像と、表現手段は異なりますが、社会に対して明確なメッセージを発信している作家たちの作品をおおして、時代や社会の波に立ち向かっていく術を考えます。

#### 作家略歴、出品作品リスト、作家のことば

作品リストの記載は、タイトル、制作年、材質、サイズ、所蔵者名の順である。

#### 李 晶玉 RI Jongok

1991 東京都生まれ  
2018 朝鮮大学校研究院総合研究科美術専攻修了

在日朝鮮人3世という立場から国家や民族に対する横断的な視点と、絵画とコラージュを組み合わせた手法による作品を開拓しているアーティスト。出品作品では、青空を背景に、広島に原爆を落とした爆撃機エノラ・ゲイの内部を描き、戦争によってもたらされることへの想像を促そうとする。

#### 1 Enola Gay

2022  
アクリル、鉛筆、ペン、デジタルプリント、紙、パネル  
acrylic, pencil, ink, digital print and paper on panel  
150×210cm  
作家所蔵  
Collection of the artist

#### 2 Dome

2022  
アクリル、鉛筆、ペン、デジタルプリント、紙、パネル  
acrylic, pencil, ink, digital print and paper on panel  
90×120cm  
作家所蔵  
Collection of the artist

#### 3 Sight

2022  
アクリル、鉛筆、ペン、紙、パネル  
acrylic, pencil, ink, digital print and paper on panel  
91×72cm  
ギャラリー Q所蔵  
Collection of Gallery Q

#### 4 Ground Zero

2022  
アクリル、鉛筆、ペン、デジタルプリント、紙、パネル  
acrylic, pencil, ink, digital print and paper on panel  
180×450cm  
個人所蔵  
Private collection

協力: Gallery Q  
Courtesy of Gallery Q

\*\*\* 作家のことば \*\*\*

今回展示している作品は、2022年3月に原爆の団丸木美術館で開催した個展「SIMULATED WINDOW」に合わせて制作したシリーズの4点である。

丸木美術館での個展の話をいただいた時、作品や内容について美術館側からのキュレーションは特になかったが、第二次世界大戦の末期に広島・長崎に投下された原子爆弾、今の世界での核兵器や戦争について作らざるを得ないと思った。丸木美術館という会場の特質はもちろんのこと、私自身、それらに対して幼少期から大きな関心があったからだ。それは私が在日朝鮮人3世という出自で、日本による朝鮮の植民地化にルーツを持ち、朝鮮学校で民族教育を受けてきたことも関係していると思う。

「SIMULATED WINDOW」という展示タイトルは、広島に原爆を投下したB-29戦闘爆撃機「エノラ・ゲイ」の格納庫の壁に残された、軍兵士たちによる落書きである。おそらくはB-29の窓からの、日本への原爆投下の風景を想像して描かれたであろう、記号的で呑気な落書きにつけられたタイトルだ。私はこの落書きとそのメンタリティに、自分が試みる仕事への共通性を感じ取ったのだと思う。windowの語源は「wind（風）+aug（目）」である。また、ローマ最大のドーム建築であるパンテオンの天窓は、採光と換気を目的としてドームの中央部分が「目」のようにぼっかりとあいていて「oculus

（目）」と呼ばれている。鉄骨だけ残された原爆ドームの内側からの風景と、B-29の半球状のコックピットからの風景が重なったように見えた時に、視点を得たような感覚があった。

窓に見立てたいくつかの視点からの、想像の風景を並べた作品たちである。

歴史や戦争に対して、資料や作品から情報を得て、その影響下で想像するに過ぎない。フィクションにせよノンフィクションにせよ、もしくは国家や共同体の持つストーリーにせよ、編集や創作といった誰かの作為の層を通して。そのレイヤー越しの風景を覗き見ている。国家的な制約も、属性による抑圧も、その檻を自覚しないと「自由」のための抵抗もはじめられない。私の仕事が、観る人の「あらがい」に視点を与えることができれば幸いである。

#### 寺田 健人 TERADA Kento

1991 沖縄県生まれ  
2017 沖縄県立芸術大学美術工芸学部美術科芸術学専攻卒業  
2019 東京藝術大学大学院美術研究科先端芸術表現専攻修士課程修了  
2024 横浜国立大学大学院都市イノベーション学府都市イノベーション専攻博士後期課程単位取得満期退学

ジェンダー役割など社会が作り出した規範を内面化して、人が思考や行動を決定することをテーマに、写真やパフォーマンスを軸に表現するアーティスト。本展では、沖縄の風景と薬莢を組み合わせたシリーズ作品で、沖縄に残る戦争の傷と記憶を提示し、継承しようとする。

#### 5 barrack and peace #1 green space plan

2023  
トタン、印画紙、蛍光灯  
galvanized plate, photographic paper and fluorescent light  
125×65cm  
作家所蔵  
Collection of the artist

#### 6 barrack and peace #2 sniper training range

2023  
トタン、印画紙、蛍光灯、ライトボックス  
galvanized plate, photographic paper, fluorescent light and lightbox  
125×65cm  
作家所蔵  
Collection of the artist

#### 7 the gunshot still echoes #1\_shisa

2023  
コンクリート、薬莢、UVプリント  
concrete, cartridge and UV print  
30×30×5cm  
作家所蔵  
Collection of the artist

#### 8 the gunshot still echoes #2\_torii

2023  
コンクリート、薬莢、UVプリント  
concrete, cartridge and UV print  
30×30×5cm  
作家所蔵  
Collection of the artist

#### 9 the gunshot still echoes #3\_chimney

2023  
コンクリート、薬莢、UVプリント  
concrete, cartridge and UV print  
30×30×5cm  
作家所蔵  
Collection of the artist

#### 10 uchikabi for militarism

2023  
薬莢、紙、ブリキ、アクリル、切れた電球  
cartridge, paper, tin plate, acrylic and burned-out light bulb  
45×30×8cm  
作家所蔵  
Collection of the artist

#### 11 okinawan silence

2024  
コンクリート、薬莢、UVプリント  
concrete, cartridge and UV print  
120×150×5cm  
作家所蔵  
Collection of the artist

\*\*\* 作家のことば \*\*\*

社会が作り出した「性」や「生まれ」に関する諸規範によつて人々の行動・思考が決定されていく生政治に関心を持ち、ラディカル・フェミニズムが生み出した「個人的なことは政治的なこと」の実践として、主にパフォーマンスと写真を軸にして制作を行っている。

\*\*\*

沖縄では毎年6月23日の「慰霊の日」にセレモニーが行われ本土のメディアでも報道されている。一見するとその報道や、観光地としてのリゾート的なイメージによって平和な世界